

王子を得ての喜びは「出家の相あり」との予言によつて曇つてゆく。それ以後、大王は群臣に命じて、出家の動機になるがごとき、あらゆるものを除かれる。

太子七歳にしてその教育は始められた。文武両道にわたる教育は、天性聡明の太子をしていよいよその麗質を輝きあらしめる。

太子十五歳、立太子の式は挙げられた。

生・老・病・死、愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦。大地に生きる者は、みな苦悩の運命に翻弄せられ、重き鉄鎖につながれる。

ああ、誰かこの一切衆生の内的運命を一身に荷負して、解説の大道を求め、徹底的なる断案を獲得して、一切衆生を救済するものはないか。

梅檀は二葉より香し、悉達多太子は、天性慈悲心に富む。時には、小虫の小鳥に啄まれるのを見て、弱肉強食の宇宙の矛盾相に涙し、提婆ダイバによつて傷つける雁の上にする、愛護のみ手はさしのべられる。ともすれば、その心眼に映ずる人生の矛盾、暗黒。太子は長ずるに及んで、ようやく人生に懷疑し、煩悶し、悲痛せんとする。

この太子の様に胸を痛めたる大王と群臣は、太子の心を逆転せしむべく、一大歓楽郷を実現せんものと立案せられた。

いわゆる三時殿の造営がそれである。

寒、暑、雨期の三時によつて、暖殿、涼殿、中殿と天を摩する高樓、天上の美にもまがう壮嚴華麗なる宮殿、それをめぐる美しい庭園、聞こゆる歌舞音曲の音色、かしづく美女幾百千、しぼむものは花にても摘みとれよ。老いたる者、病める者は、夢にても見ることもなけれ。超世の歓楽は太子をめぐつて描かれる。

三時殿ができ上がると、次は妃の問題がおきた。摩耶夫人のお里である拘利城、善覚王の長女耶輸陀羅ヤシュトラは、当時、中印度第一の美人の誉が高かつた。選ばれて、この絶世の佳人耶輸陀羅は太子の妃にあげられた。

三時殿、美紀、人生の幸福はここに集まつた。

ああ、されど太子の胸中、うずまきおこる憂愁、苦悶、底なき疑惑は、はたして満たされ、解決されたであろうか。

「三界は悩みだ。猛き火のごとく、浮かぶ雲のごとく、水の月、谷の響き、幻、水泡のごとし。愚の者、若さを愛あずれど、やがては老と、病と死のために壊壊れん。」

四門出遊

太子ある日、城外の園林に遊ぶ。国民になされた布達を裏切りて、そこに見るかげもなき老人が現われる。

太子の心は痛む。その時太子は単に老人を見たのではない。人間の宿命たる「老」を諦観したのだ。

次の時車駕は南門を出た。

太子はここで病人を見た。王宮に帰つた太子の心はより深い煩悶へと沈んでゆく。三度太子は西門を出た。

そこで太子は死者の葬列を見た。太子はその時、「死」を見たのだ。死滅は生きとし生けるものの運命である、太子の苦悩はいよくその極限へと進んでゆく。最後に太子は北門に出家を見る。

「私は世の老病死を見て解脱せんと思ひ、親族を捨てて静かなる所に道を修めている。正法によつて官能をおさめ、太慈悲によつて衆生をまもり、世間の穢れに染まないのである。」

出家の告白は太子の心を動かした。そうして叫びたもうよう、

「人間の中にこれにまさるものはない。私も家を捨てて道を学ばねばならない。」と。その間に王子が誕生せられた。ラゴラと名づけられた。ラゴラとは障さわりということである。

出家求道

今や太子の心をつなぎとめる何もものもない。出家求道の志は、いかんともできがた。潮のごとくおしよせる何もものかの力、太子は今やその心の声のまにまに、一切を捨てて求道の旅に出ようとされる。

浅薄な笑いが何になる。

悩む者よ悩みぬけ、苦しむ者よ苦に徹せよ。

うずまきかえる衷心の声の中に享樂の巷が何に値する。

不滅の歡喜に入らんとする者よ、まず大悲觀をも避けるべからず。

今や憂いのどん底に立ちて、しかも鬱勃うっぼつたる求道の心をどうすることもできぬ時、3太子は幾十の美姫たちのあさましい寢姿に眉をひそめた。

夜色沈々いよいよ出城の時は来た。天に声あり、「時は今である。一切を捨てて、不滅の真理を探ねて出てゆけ！」

愛姫耶輸陀羅の寢室に至れば、花の顔、月の眉、円かなる夢にさそわれてスヤスヤと眠りたもう。

断ち難きは人の子の愛執、ゆきつもどりつ、名残りをおしみたもう。されど「真理を求めて出でよ！」との天の無上命令をいかにすべき。ついに御者車チャナ匿の部屋にゆき、名馬カンダカを引き出させてこれに打ち乗り、

「我もし生老病死、憂悲苦悩を解脱すること能わずば再び帰らじ。」

と誓いつつ、二月七日の天地も死せる真夜中すぎ、宮殿を後に、大願成就のために出発せられた。

かくて太子は、跋迦バギヤの深林に急ぎ、泣き叫ぶ車匿に、宝冠をとり、瓔珞をぬぎ、剣をとつて与えて王宮に返し、貧しき法服に身を包んで跋迦林の奥深く、有名なる跋迦仙人を尋ね、ついで弥楼山ミルに阿羅々アララ仙人を訪ひ、最後に鬱陀羅ウツダラ仙人に会われた。かく当時有名なる三仙をたづねて道を聞かせるも、その説くところは、肉体を苦しめ修行して、天上の果報快樂を求めるにすぎず、太子の深刻なる問いに答えるに由なく、太子をして失望させてしまった。

これより六ヶ年、太子の苦行ははじめられた。だがそれもついに無効であつた。太子は苦行林を去り、象頭山ゾウザを下つて、尼連禪河ニレンゼンガに入り、沐浴して身を清め、善生村ゼンシヨウの

長の娘が供養する乳靡に体力を養い、尼連禪河の畔、菩提樹茂つて天をおおうあたり、大磐石を座と定め、吉祥草を敷いてその上に結跏趺坐したまい、

「虚空より刀杖、我が身に雨降り、寸々節々身体を割くとも

我もし生死の海を渡らずば、この菩提樹下をついに移らず。」

との大決心を固めて、端座瞑想、内外の悪魔と最後の戦いは開始せられる。

降魔

釈尊、菩提樹下に端座せられるや、諸天善神は来つて、ある者は天蓋を懸け、ある者は天華を盛り、ある者は天樂を奏して、正覚のみ座を莊嚴した。

時に天の大魔王は、彼の眷族をして、正覚成道の妨げをしようとする。あるいは美しき三人の美女となりて媚び誘い、あるいは、快楽、あるいは名利。されど金剛の志、動かすべくもないと見るや、悪魔はついに最後の手段に訴える。

一天にわかにかき曇り、暴風おこり、雷鳴電光天地にとどろき、悪鬼夜叉、牙をかみ、毒火を吹く。刀剣、巨岩を雨降らすさま、喩えんに物なし。

時に釈尊を莊嚴せる諸天善神はおそれをなして、天蓋を持ち天華をとつて、姿を消す。ここに釈尊はただ、独りこのものすごき中に端座したもう。

巨岩下つて釈尊を木葉微塵とするかと思える間に、見よ！ 巨岩も刀杖も、一切は変して天蓋となり、瓔珞となり、天華となりて、釈尊の身边を再び大莊嚴の中に飾る。

心して聞け若人よ！

汝を真に莊嚴するものは何ぞ。

単なる幸福も賛美も、苦惱一度おしよせる時、泡沫のごとく散失せん。

されど、迫害、非難、攻撃、苦痛、貧困、等々の中に、奪闘して動かざる時、その矢弓刀杖は変じて真に汝を莊嚴する不滅の華とならん。

聖人偉人の生涯を見よ。

ただ苦闘の中に勝ちつづけて、禍を転じて福となし、刻苦奮闘、その真価を成就せるにはあらざるか。

第一の莊嚴失われんとするや、たちまち悪魔と妥協して真の生活を捨てる。
ああ。弱者に不滅の栄冠なし。

悪魔と戦うこと切にして、悪魔はいよいよその暴威をたくましくゆうする。されど大山のごとく不動の真力の前に悪魔何するものぞ！

「汝の第一軍は楽欲

第二軍は不快

第三軍は飢渴

第四軍は渴愛

第五軍は懶惰

第六軍は怖畏

第七軍は疑い

第八軍は虚栄と剛情

第九軍は名利

第十軍は自らを賛め他を毀ることなり。

これは汝の軍、汝の武器なり、勇者は勝ちて折伏し、安らけきを得たり。」
煩惱悪魔の正体は暴露された。自然に活現する大慈悲は、この悪魔をも撰取し降伏しおわりたもう。

成道正覚

時は二月七日の夜ふけ、初更、天地寂として声なく、寒月高く冲天にかかり、一点の雲さえ見えず。太子はついに悪魔に勝ちて、心いよいよ清浄に、寂静に、欲を離れ、悪を超え、深い禅定に入つて平等実相を覚り、苦楽悲喜を滅ぼして、ついに一切の繫縛を解脱して、遠き過去を憶い、宿世を觀じ、一切の無明を滅ぼし、闇を晴らしたもうことができた。

さらに第二更に至れば、神通の眼は開かれ、十方衆生、果てしなく生死界に流転する痛ましき相をつきとめたまい、十方世界は我が有なり、一切衆生は我が子なりと叫びたまひ、大悲の熱涙は十方衆生の上にそそがれる。

さらに第三更に至るや、苦の因をつきとめて、煩惱であると知り、これを滅して涅槃に至るの道を明らかにしたまい、一切衆生が無始以来生死流転するは、無明にはじまつて老死に終る十二因縁の道理によることを悟り、根本の無明を大般若の智慧によつて破りたまひ、輝く大光明によつて一切方法の根源をつきとめて、心は清浄に、身は安らかに、ここについて久遠の法身を得証して、釈迦牟尼世尊となりたもう。

時あたかも第四更、あけの明星燦として輝く二月八日の暁、太子三十五歳。畢生の大願は成就して無上覚を開きたまい、生死を渡つて涅槃を自証し、ここに人類の救主、一切衆生の燈炬として、如来転法輪の聖業は開始せられたのであった。

仏陀 仏陀とは、最高理念の実現された絶対人格のことである。仏陀はその主觀界に自覚を成就し、その客觀界に覚他を成就する。自覚とは、法の自証であり、覚他とは一切衆生を利益することである。古来、この自利利他の世界を、自覚、覚他、覚行窮満という。法を自証体得するとは、聖なる法身の体現である。仏陀の得証せる絶対真理を法身というのである。真理は常に人格となり、実行となり、説法となる。法身来つて釈尊となり、生活となり、やがて説かれては八万四千の法門となる。平等なる大慈悲と、智慧光とは仏陀の具体的内容であり、生命である。

無我の実践と提唱

仏教とは何ぞや。

伝えられる一万巻の經典、そはいつたい何を教えんとするのであるか。聖道といい、浄土といい、四聖諦といい、六波羅密といい、慈悲といい、智慧という。その廣大にして幽玄なる大乘仏教を一言にして尽くせば「無我」の提唱であり、その実践の指導である。

一切の迷妄、暗黒、罪悪はただ、我への執着より生まれる。

小我の小さき城にたてこもりて、己一人の享樂を求め、いたずらに利己主義に陥りて、万人の幸福を無視し、邪見我慢にとらわれて天地の公道に反逆す。その順境に立つや、その眼中にあるものは、自己の名誉と権力と、富と五官の快樂のみであり、その逆境に立つや、悲歎厭世、自暴自棄、憤怒、墮落、我を呪い、世を憤り、見るかげもなき醜状を白日に曝して恥じない。人生は楽しい所と人生を肯定するも、本質的な光明を把握してなされたのではなく、いわゆる幸福の続く間の戯れであり、迷いである。積尊はかかる人生の樂天主教をとりたまわず。

また悲觀厭世白眼世をすねて、自暴自棄する人生否定の者は、智慧に至らない迷いとしてねんごろにこれを出でんことを教えたもうのである。

かくのごとく人生を肯定するも、かくのごとく人生を否定するも、二つの相ともに迷路の半面にすぎない。いずれも「我」より生れる相だからである。現実の小欲我欲にひきずられて、理想を失い、道義を滅ぼし、本能我の声にのみ生きる。その根本的態度に差はありえない。

かかる迷妄なる心境を称して、我といい、我執といい、無明といい、邪見といい、逆悪といい、疑惑といい、虚偽といい、不実という。これら一切はことごとく、とらわれたる私の同一異名であり、あるいは私の種々相にすぎない。

この我、一度動けば、その考うることは、貪欲、瞋恚、愚痴以外の何もものでもなく、行なうところは己一人の享樂以外の何もものでもあり得ない。これに学問を授けるも、これに技術を施すも、真人生を成就するに何らの利益なし。かかる迷妄の人の集まる6ところ、家庭も、社会も、国家も、全て地獄道、餓鬼道、畜生道のための暗黒界となり終わるであろう。

大無量寿経五悪段に、この一切衆生の我執によつて生死界に流転する相を照破して曰く、
 「奢淫矯縦して、各快意せんと欲し、心に任せて自ら恣にして互に欺惑し……云々と。」

「賢を嫉み、善をそしり……臣はその君を欺き、子はその父を欺く。兄弟、夫婦、兄弟、知識たがいに欺く。各貪欲、瞋恚、愚痴を懐き、自らを厚くせんと欲す。」と。

「心を恣にし、意を快くし、身を極めて樂と作す。」と。

「二親に孝せず、師長を輕慢し、朋友に信なく、誠実を得難し。」と。

「心、常に悪を念じ、口、常に悪を言い、身、常に悪を行じ、かつて一善なし。」と。

「父母兄弟眷屬を害せんと欲し、六親憎悪して、それをして死せしめんと願う。」等々かくして一切の悪逆無道は、ただ私の發展として生まれる。

無我とは、ただ単に、我無しというがごとき平面的な意味ではありえない。身をもつて体験すべき人間の最後の唯一の生活態度である。

無我とは、私の否定である。欲望の、煩惱の否定である。本能私の否定である。否定とは消滅ではない。真実に生かすことである。タドンに火をつけることである。仏心によつて凡心を、大我によつて小我を、価値我によつて本能を揚棄することであ

る。仏心に生きることである。智慧光によつて無明を滅ぼすことである。大信心によつて疑惑を粉碎することである。しかして大信心とは仏心であり、仏性である。

註 揚棄とは、甲と乙と、相反するものの、どちらをも棄てずして、丙という第三の天地において、甲も乙も生き得る世界を生み出すことである。丙の天地において甲乙は矛盾を持ちつつ、しかも統一される時、揚棄されたというのである。

仏は絶対価値であり、絶対真理である。煩惱や本能我は、否定さるべき我を本質とする。この仏と凡との一体なる世界、これを大乘菩薩道という。本能我がなくなつたのではない、生かされたのである。我がなくなつたのではない、揚棄されたのである。この仏心によつて我の否定されたる世界を称して無我というのである。

釈尊をはじめとして、印度の竜樹、天親菩薩より我が国、弘法、伝教、道元、法然、日蓮、親鸞等の諸聖といえども、本能我すなわち煩惱がなかつたのではない。久遠の仏心によつて仏凡一体の体験に生き、廣大普遍の大生命に乗托して、それぞれの色彩に生きられたのである。小我の否定によつて大我に生きられたのである。

もしそれ、その無我得の方途に至つては、この小冊子につくすことはできない。各自がそれぞれ至心に求道三昧に入つて体解すべきである。

人もし無我なれば、親にあつては孝となり、夫婦にあつては和となり、兄弟にあつては友となり、社会に対しては、よく燈炬となり、柱石となる。

大無量寿経、嘆仏偈に法蔵菩薩の願心を見よ！

仮令身止 仮令身を

諸苦毒中 諸の苦毒の中に止くとも

我行精進 我が行は精進にして

忍終不悔 忍びて終に悔いざらん

一読、三読、百読、ついに一生涯をかけて身をもつてこの一偈を体解すべし。一切群生の生死界に、無限に、思惟し願行し、神通応化したもう大慈の菩薩魂、この聖旨に生くべきである。地獄の中、餓鬼の中、火の中、氷の中、いかなる苦悩が横たわろうとも、この菩薩魂に立ち止つた時、そこに我を碍げる何ものありや。坦々たる無碍道は現前脚下に開くのである。

教壇上の教師よ！ 一切を児童に捧げて立つ無我の人となれ。

上は中央政府の大臣より、下は町村の吏員に至るまで、己を空うして全身全霊を捧げてかかる無我の人となれ。

一切の団体、一切の社会、一切の事業、社会人生いかなる隅々に至るまで、求められるのは、この無我的人ではあるまいか。

見よ！ 現代人の傾向を。口を開けば「自我の権利」を主張する。自我の権利もとより主張すべし。しかれども、人生はただ単に「俺が」「己を」と主張することによつて成立するであろうか。その人生の本質に反し、文化の根源に逆流する個々人の生き方は、やがてその報酬として、大きな惨禍を共同に受け取らなくてはならない。

西洋は文明の国、東洋は文化の国、西洋文明もとより尊むべし。けれども、ギリシヤに源を發したる、享樂的、個人主義的、現實的、唯物的な、いわゆる物質偏重、人間靈性無視の悪傾向は、すでに欧米自らをして歎息せしめているではないか。

無我の旗印は、大乘仏教独特のものである。幽玄なる涅槃の体現、深遠なる空の哲理、これなくしてはついに真人生はあり得ない。その生命を握るものは仏教である。大乘菩薩道の大旆をおしすすめて、最高文化、無我の道義を人類の上に奪還する、これ、我らに課せられた使命ではないか。

我らは自信と權威とを持つて次の如く宣言する。

一。無我の実践をぬきにしては一切の人間の営みは、迷妄であり、墮落である。

一。人格の基調は、無我の大信念にある。これを欠除しては真人格はあり得ない。

一。天地創造神、運命神、常一主宰の神我、卜占、祈祷、方位、時の吉凶等々の一切をけ破つて、独尊を自証し、生活し、絶唱された釈尊の宗教のみ、唯一真實である。釈尊はこの大信心の自覚以前に何らの権力者を認めなかつた。しかしてその自覚内容こそ仏であつた。その自証の仏こそ、永遠に、久遠に、時と処とを超えて人類に実証実践さるべき、文化の基調であることを宣言する。

8

一。我らは聖徳太子の、世間虚仮、唯仏是真の金言を体し、仏、法、僧の三宝に絶対帰依して、一生を求道念仏に生きる。

一。我らは同胞と共に如来普徧の生命に一致して、勇敢に、不斷に、懸命に無我の大法を宣揚して、大乘菩薩道、伝普化のために、あらゆる社会相に働きかける。